

時をかける建築を 構造家・坪井宏嗣

朝倉幸子◎TH-1
illustration:Taco

■父の背

構造家・坪井宏嗣さんは芳しいコーヒーの香りとともに迎えてくれた。ポットに入れてコーヒーを現場に持ってきてくれたことがあると、本誌（2020年10月号）で表紙掲載の古澤邸（設計/古澤大輔，JIA日本建築大賞2019受賞）の監督から聞いていた。坪井さんの温かい人柄が現れる一コマだ。

1976年に母親の実家がある山形市で生まれ、八王子市で育つ。活躍する構造家が、職業選びに父親の影響を受けたと話すことがある。坪井さんも建築設計者として長いキャリアの父親をもつが、建築を選んだのは家の本棚にあった「大聖堂」（ケンフォレット著）を高校2年生のときに読んだのが、きっかけだという。理数系が得意だったし、経済的なことを考え国立に進学すると決め東京大学に。その頃の工学部建築学科は安藤忠雄教授の人気から難関だったが駒を進めた。父親が仕事に没頭し、家庭は二の次になっていた反感が交錯したのか、無意識に設計を避けて歴史を専攻した。坪井さんの言葉を、覇志堂はJr.も同じことをいっていたと苦笑い。

歴史の本を読んだり、繁華街の成り立ちを研究するのは楽しかった。しかし、伊藤毅教授に「資料集めだけでは駄目、もう一度建築の勉強を」といわれてしまい「4年生を2回」と明るくいう。ポルト接合部の実験が卒論となった。東京大学大学院工学系研究科建築学専攻修士課程では合成梁のねじり剛性について解析的な研究をした。構造を選んだのは、将来的に仕事の営業先が同じ分野の建築技術者の方がよいだろうと考えたからなのです。

■構造家・佐藤淳

坪井さんの師匠なる存在の構造家は、近年構造界で存在感を増している東京大学大学院准教授の佐藤淳さんである。佐藤淳構造設計事務所の初所員とし

て、構造設計の実践を伝授された。「これからの構造界はこの人が担っていく」と見極めたそうだ。佐藤さんとは大変だったかという覇志堂に「必死でやっていたから大変と思う暇もなかった」という。「自分には到底思いつかないことをやるのが佐藤さん。着想の出どころもわからない新鮮な発想がポンポンと出てくる。素晴らしいと思う」。

提出した図面にOKが出るようになった3年目の頃、自分なりの哲学をもって設計をしたいと考えるようになった坪井さん。佐藤さんが大構造家・木村俊彦の最後の弟子として修行し、独立したときの年齢と同じ。構造家の流れに身を置く一人としての自覚も出て来た。佐藤さんの事務所受けたはこだて未来大学研究棟を担当してから独立したのです。

■構造&バリスタ

健康第一が身上、そのためには職住接近。美味しいコーヒーを淹れ、理科の実験のようで楽しいからと、得意な料理で家族との時間を大切に。それは「死ぬまで建築をしたいから」。

建築家とはお互いの思想を対話して重ねて設計し、できるだけ実験を行い検証している。広げようと思えば広がり、深く行けば深くなるのが構造設計だと思ふ。時代を超えて変わらない価値を生み出すことに専念したい。坪井さんは本誌に「建築が成立するために構造上不可欠な役割を果たしているのにも関わらず、邪魔者扱いされたりなかったことにされたりする柱。その在り方を問い直すことで生活に溶け込ませることが可能ではないか」と書いている。

これからは体育館などの大空間もやっていきたい、と話す。構造家として坪井宏嗣さんの真価が問われる時が間近です。

